

平成 2 年度

児童生徒の映像学力を高める一考察

～映像制作能力形成を中心として～

川崎市総合教育センター 視聴覚Ⅱ研究会議

児童生徒の映像学力を高める一考察

—映像制作能力形成を中心として—

視聴覚Ⅱ研究会議

河野麻子¹ 小松良輔² 井部良一³ 前川 稔⁴ 渡辺浩司⁵ 原 勤⁶

要 約

高度な情報化社会に生きる子どもたちには、それに適応していくための能力形成が必要であると考えられる。

本研究では、映像情報の処理能力を「映像学力」すなわち映像視聴能力・映像活用能力・映像制作能力ととらえ、その向上をめざし、特に映像制作能力形成を研究のねらいとした。

そこで、学級活動、児童会・生徒会活動の各種委員会・クラブ活動などを中心に、校内放送番組やその他の映像作品の自作を児童生徒自らが試みる中で、映像学力の向上を図りたいと考え、1年次 —「ビデオレター」制作と「映像作りに関する意識調査」の実施、2年次 —「ドラマ・クイズ・学校紹介」などの番組作りに取り組んだ。子どもたちは、映像制作に強い興味関心を示し喜々として制作活動を行った。また、グループによる制作活動から男女間の協力体制ができるなど、好ましい人間関係の育成にも役立った。

そして、文字や言葉と同様に年齢に応じた指導を行うことで、更に映像学力を高めることができると考え、映像制作に関する大まかなカリキュラムを作成した。

キーワード：映像学力・映像制作能力・映像制作活動・映像制作カリキュラム・学級活動

目 次

はじめに

I 主題設定の理由……………	200	3. 児童生徒の映像作りに関する調査の実施（その2）	
II 研究のねらい……………	200	4. 映像制作に関するカリキュラム	
III 研究の方法……………	201	V まとめと今後の課題……………	207
IV 研究の内容……………	202	おわりに	
1. ビデオレターを基本とした映像制作能力の領域と項目		参考文献・指導助言者	
2. 児童生徒の映像作りに関する調査の実施（その1）			

¹川崎市立向丘小学校教諭（主任研修員）

²川崎市立井田小学校教諭（研修員）

³川崎市立新町小学校教諭（研修員）

⁴川崎市立川中島中学校教諭（研修員）

⁵川崎市総合教育センター指導主事（平成2年度）

⁶川崎市総合教育センター第一研究室長

はじめに

情報化社会といわれる現代社会においては、情報の量的増大と質的多様化が進行し、学校教育に対しても変革が求められている。すなわち、今後ますます高度な情報化社会に児童生徒が適応していくための能力形成が望まれているのである。それは、多種多様な情報を主体的に受け止め、その質や有効性を判断して活用するとともに、自らが新しい情報を作りだし表現する能力の育成のことである。

そこで、本研究では、映像を通して情報を効果的に伝達する能力を児童生徒に身につけさせたいと考え、児童生徒による映像制作を中心に研究を進めてきた。

I 主題設定の理由

いまの子どもたちが担う21世紀の社会は、現在よりもますます高度な情報化社会になっていると思われる。そのような新しい社会に子どもたちが適応していくための情報処理能力が必要とされる。その情報処理能力とは、次のように考える。

- ①映像情報を正しく読み取る力、コミュニケーションの手段として自らの手で映像を作り出す力。
- ②コンピュータ等を使って学習し、情報を処理する力。

そして、本研究では、①の映像情報の処理能力について研究を進めることにした。

現在まで行われてきた放送教育や視聴覚教育は、教科の目標達成のために放送教材や視聴覚機器などを学習の手段として活用してきた。それに対して、新しいメディア教育は映像そのものを学習対象とした考え方であり、それを理解把握し、新しい表現手段として日常生活に活かす力としての映像学力の形成をねらうものである。つまり、これまでは映像を受け手として利用してきたが、これからは送り手としての能力形成も望まれているのである。

映像学力とは $\left\{ \begin{array}{l} \text{① 映像視聴能力（受け手としての能力）} \\ \text{② 映像活用能力（使い手としての能力）} \\ \text{③ 映像制作能力（送り手としての能力）} \end{array} \right\}$ としてとらえている。

また、本研究が、この3つの能力のうち映像制作能力形成を取り上げたのは、

- ・映像制作能力が、映像教育の中で重要とされながらも今まで計画的な指導があまり意識されなかった面であり、言葉や文字による意思表示に加え、今後不可欠になってくると考えられる。
- ・ビデオカメラやビデオデッキなどが安価でハンディーになり、学校や家庭においても今後ますます普及が見込まれる現在、児童生徒の映像制作への関心も高まってくると思われる。

以上のような理由からである。

II 研究のねらい

- 1 児童生徒の新しい能力として、映像学力の向上をめざす。
- 2 映像学力の三つの能力のうち、映像制作能力形成をねらう。

Ⅲ 研究の方法

1. 映像制作能力の定義領域について

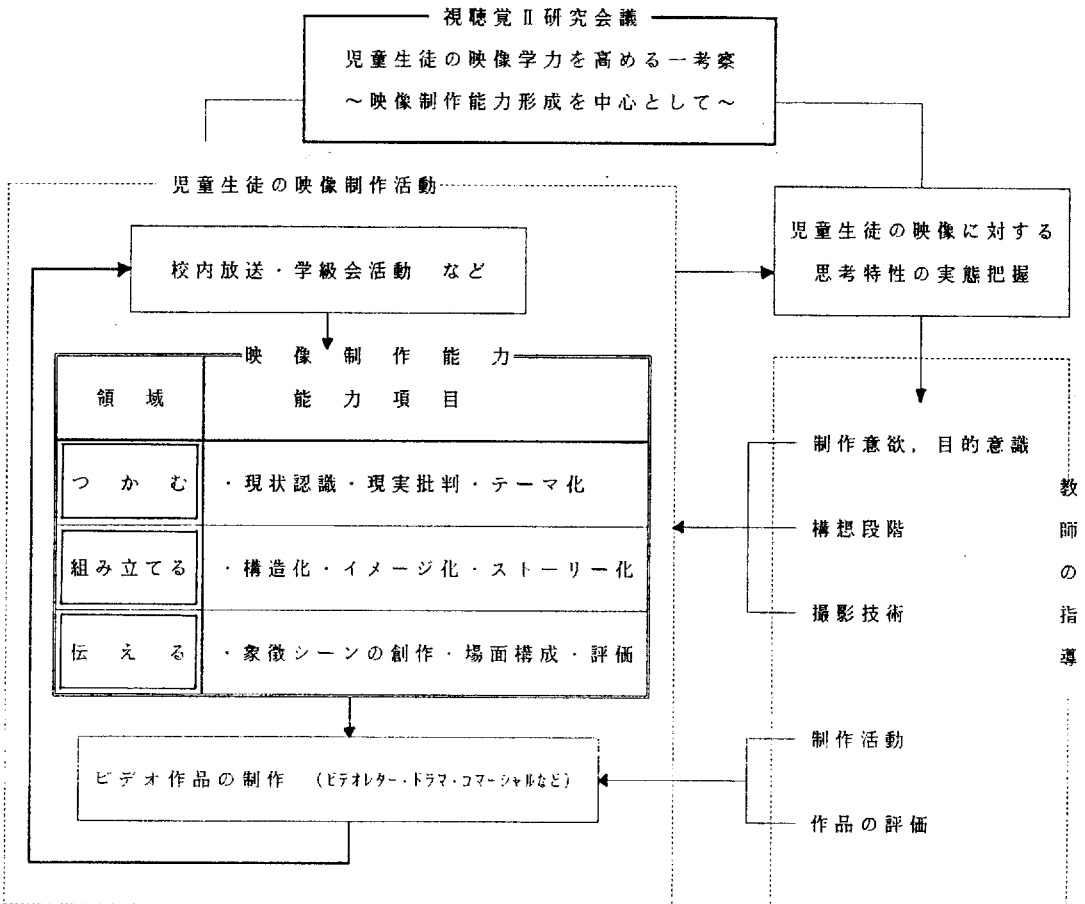
- ① 現状をつかみ問題を見つける力 (問題把握) 「つかむ」
 - ② 情報を構成し組み立てる力 (情報構成) 「組み立てる」
 - ③ 自分の考えを効果的に伝達する力 (情報伝達) 「伝える」
- } としてとらえる。

2. 研究を進めるための具体的手段について

本研究は開発研究であるが、教科教材という限られた視野ではなく、教師や児童生徒の広い発想で、児童生徒の手によってどのような映像作りが考えられるか、また、それによってどのようにしたら、映像制作能力を高めることができるかを研究していった。

そのために、校内放送番組制作や学級活動などを中心に映像の自作を試みる中で、映像視聴能力や映像活用能力も含め、映像学力の向上を図っていきたいと考えた。

3. 研究構造



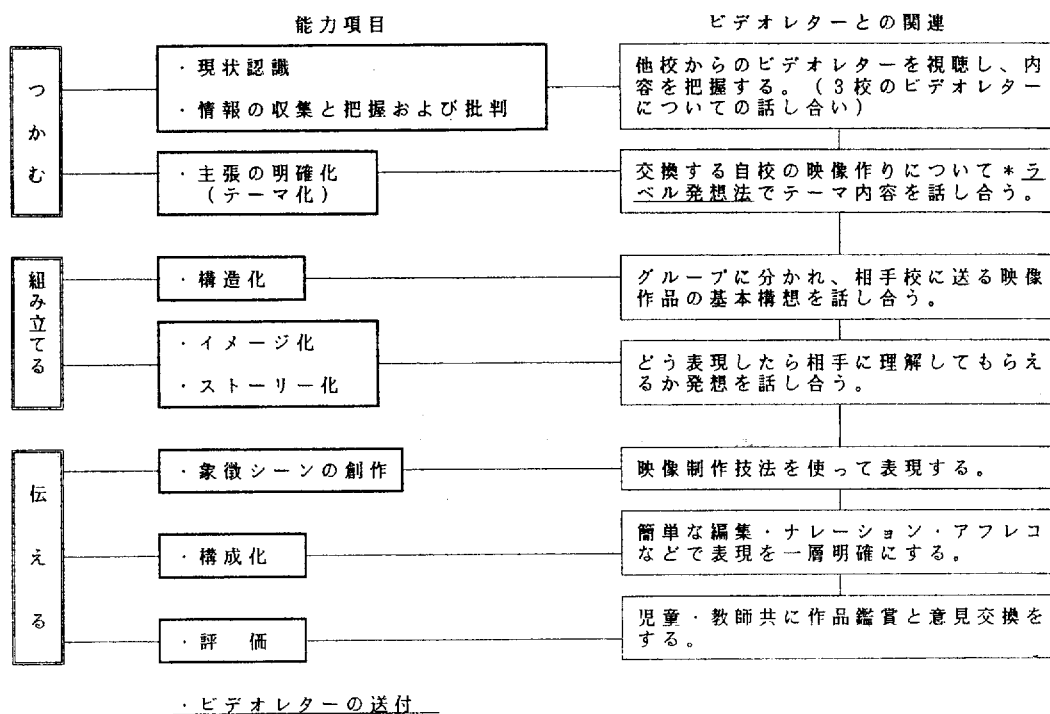
Ⅳ 研究内容

高度情報化社会、ニューメディア社会といわれる現代社会に子どもたちが適応していくための能力形成が必要と考えられる。そこで、これまでの言葉や文字による意思表示に加えて、映像情報の処理能力（映像を正しく読み取り、そこから意思伝達し、自分の手で駆使していく能力）を児童生徒がその能力を身につけてくれることを願い、この研究に取り組んだ。

このねらいを達成するには、児童生徒の興味の持続が大切であることから、作品作りをすることによって映像制作能力の形成を図りたいと考えた。児童生徒の映像制作には、ドラマ・記録・コマース・アニメーション・ビデオレターなど、さまざまな内容が考えられる。

そこで、1年次はまず、映像がコミュニケーションの新しい手段として大きい期待と可能性をもつ、ビデオレターに視点をあて研究実践を進めた。このビデオレターを取り上げたのは、映像制作能力の定義領域「つかむ」「組み立てる」「伝える」が、児童たちにとって最もとらえやすいと考えたからである。そして、その実例として、向丘小学校の6年生の1学級にビデオレター作りを経験させることにより、研究の検証を進めた。

1. ビデオレターを基本とした映像制作能力の領域と項目



*ラベル発想法
自己の表現発想をラベルに書き表示し合うことで映像表現方法を高め構造化していく制作技法。

・ビデオレター作りを通して

この学級の児童たちは、以前にビデオカメラを使つての“ドラマ作り”を経験しているため、ビデオレター制作に対しても抵抗がなく、意欲的に進められた。また、ほとんどの児童が、ビデオカメラの基本操作については知っていたが、以前のドラマ作りではカメラマンを特定の児童にしたため、実際に撮影したことのある児童は少なかった。そこで、簡単な撮影技術指導を行い、活動中もその都度指導を行った。その際、児童たちが技法のみにとらわれないように留意した。これらの技術指導は、児童たちにとって有効であり、制作意欲をかき立てる一要因になった。

ここでの一番の収穫は、何よりも児童たちが喜んで意欲的に活動し、自己の映像言語で意思表示を行ったことであり、また、ドラマ作りの場合と比較すると、“送り手”として、「どのようにすれば相手に効果的に伝達できるか。」をより深く追求するようになったことである。

2. 児童生徒の映像作りに関する調査の実施（その1）

児童生徒が、映像やビデオ制作に関してどのように考えているか、今までに経験したことがあるかなど、映像作りへの関心の度合いを知り今後の研究を進めるうえでの参考にしたいと考え、簡単なアンケート調査を平成元年度（10月）と2年度（6月・10月）の3回実施した。

調査の対象（学校名・学年）は、次の通りである。ただし、対象児童生徒は異なる。

平成元年度（1回目）

・向丘小学校6年生	44名
・井田小学校6年生	37名
・新町小学校3年生	32名
・川中島中学校3年生	40名

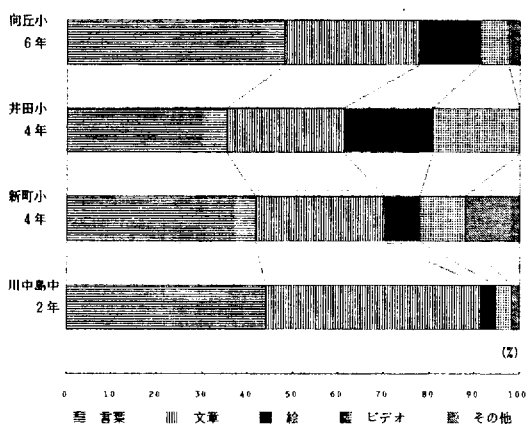
平成2年度（2回目）

・向丘小学校6年生	42名
・井田小学校4年生	31名
・新町小学校4年生	31名
・川中島中学校2年生	36名

・アンケート調査の内容と結果分析（2回目）

Q1. あなたの気持ちを表すには、次のどの方法がよいと思いますか。

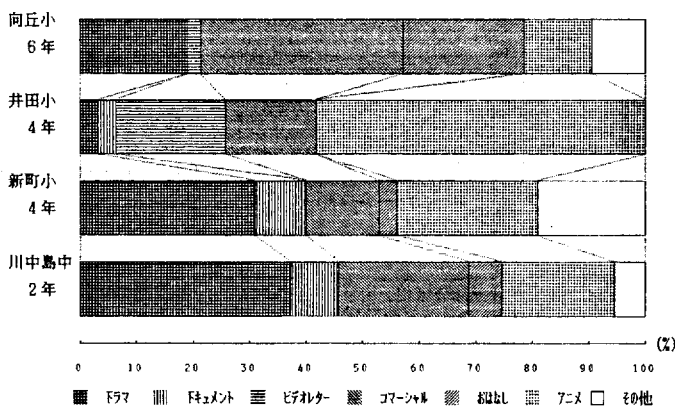
ア言葉 イ文章（作文・手紙など） ウ絵 エ映像（ビデオなど） オその他



・ここでは、意思伝達的手段として児童生徒が何を選択するかをたずねたものであるが、児童生徒のほとんどが意思表示の手段として言葉や文章を選んでいる。これは、これまでの教育によって、児童生徒に言葉や文字を中心とした表現方法が定着しているといえる。しかし、これからの情報化社会に向けて、言葉や文字による意思伝達法に加え、映像言語による意思伝達能力も身につける必要があると思われる。

Q2. もしあなたがビデオ作品を作るとしたら、どんなものを作りたいですか。

- ドラマ • ドキュメンタリー • ビデオレター • コマーシャル
- おはなし • アニメーション • その他



・ドラマに人気が集まっていることがわかる。また、アニメーションも高い割合を示しているが、これは子どもたちの大好きな分野であり、制作への憧れがあるものの、制作過程の大変さなどはほとんど意識されていないと考える。次にコマーシャルも高い率を示している。テレビの影響力をあらためて感じる。子どもたちは劇遊びを好んで行

うが、ビデオ制作の場合、演じることと撮影の両方を経験できることも魅力の一つといえよう。

・アンケート調査の結果から

これまでの研究やアンケート調査の結果から、2年次の研究は制作のジャンルを拡げ、児童生徒の意欲の持続をより大切にしたいと考えた。

そして、2年次も向丘小学校6年生の1学級に制作活動を依頼した。また、井田小学校(4年生)、新町小学校(4年生)、川中島中学校(部活動)においては、コマーシャルビデオを学年に応じた内容で制作することにした。制作にあたっては、児童生徒の発想を大切にし大人のお考えにはめ込まないよう留意し、そして、発想を豊かに出させるため、1年次も有効であったラベル発想法を用いることにした。

・ビデオ作品作りを通して

2年次に制作活動を行った向丘小学校6年生の児童たちは、これまでも国語の学習の標語作りを映像で表現するなどの経験をしているため、映像制作への興味関心も強く、「楽しい映像作り」をするための技術指導にも熱心に耳を傾けていた。この技術指導も昨年同様、児童が技法にとらわれないで、発想や思考を深めるように留意した。

そして、自分が作りたいビデオ作品のジャンルや内容をラベル発想法を用いてカードに記入させ、それによって、グループ分けを行った。その後、各グループ毎に構想を練り、撮影にとりかかった。その際、各グループに教師が付いて技術面の援助や構成についての助言などを行った。

今回のビデオ作品作りは、題材やテーマを自由に選ばせることにより、制作意欲の高揚と持続をねらった。それについては、前回以上に児童たちの意欲が感じられ、発想も豊かに表現されていた。しかし、「自分たちで好きな番組を作る」というと自己満足に終始してしまう傾向がありがちな

で、“送り手”として常に“みる相手”を意識するように働きかけた。そのことにより、児童たちは機会あるごとに映像の出来具合をみたり、構想について話し合いを行ったりしながら意欲的に制作に取り組んでいた。

これらのことから、児童生徒の発想を豊かに表現させるには、ジャンルやテーマにあまり規制を加えないこと、指導者のよりよいアドバイスが必要であること、そして、制作の目的意識をはっきりさせることが、作品を制作するうえにおいて大切であり、意欲の持続にもつながることがわかった。

3. 児童生徒の映像作りに関する調査の実施（その2）

3回目の調査は、ビデオ作品作りを経験した後、次のような項目内容で実施した。

・対象 向丘小学校6年生 41名

・アンケート調査の内容と結果による分析

()内 以下人数

Q 1. ビデオ作りは楽しかったですか。

- ・ビデオ制作をした41名のうち37名が「楽しかった」と答えている。子どもたちは、ビデオ制作に対して大変興味を示し、楽しさを満喫している。しかし、中には全く興味を示さない児童もいる。その点については、原因や方向を検討する必要があるが、多くの児童が“楽しさ”を味わっていることから、映像作りを経験させることの意義はあるといえる。

Q 2. その理由は何ですか。（複数回答）

* Q 1で「楽しかった」と回答した児童

- ア 友達と協力できたから (16)
- イ ビデオの撮り方がよくわかったから (12)
- ウ ビデオカメラを実際に使えたから (16)
- エ 自分達で好きな番組を作ったから (23)
- オ 前からビデオに興味があったから (9)
- カ その他 (1)

* Q 1で「楽しくなかった」と回答した児童

- ア 友達と協力できなかったから (1)
- イ ビデオの撮り方がよく分からなかったから (1)
- ウ ビデオカメラをあまり使えなかったから (1)
- エ もともとビデオに興味なかったから (2)
- オ その他 (1)

- ・児童たちは、自分たちで好きな番組を作れたことやビデオカメラを使えたこと、友達と協力できたことを喜びとしている。このような点が、制作意欲の高揚と持続につながると考えられる。「楽しくなかった」と回答した児童もこのような点を配慮することで減少するものと思われる。

Q 3. ビデオ作りをしてから、テレビやビデオの見かたでどんな点が変わりましたか。
(複数回答)

- ア. カメラでの撮りかたに関心を持つようになった (18)
 - イ. 物語りの展開に興味を持つようになった (7)
 - ウ. 特に変わらない (19)
 - エ. その他 (4)
- ・映像作りを経験してから、映像に対してどの程度興味や関心を持つようになったかを調査したものであるが、22名の児童が何らかの関心を持つようになったと答えている。このことから児童たちには、映像の作り手・送り手としての意識が芽生えてきているということがいえる。なお、“その他”は「アナウンサーの話し方に気をつけている」ということである。

Q 4. 今回のビデオ作りを通して、気がついたこと・感じたこと・思ったことなどを書いてください。

- ・ビデオでいろいろなものをいろいろなところから撮っておもしろかった (9)
- ・俳優になったみたいで楽しかった (4)
- ・俳優は大変、編集も大変だった
- ・レポーターを追いかけるカメラマンの大変さがわかった
- ・NGがたくさんで、カメラマンも演技者も大変だった
- ・見ているときは気づかなかったが、映像を撮るには（撮り直しが多く）時間がかかった
- ・実際撮ってみると、難しくあまりおもしろいものは作れなかったと思うが、作ることはとても楽しかった
- ・自分の思い通りに映せない場面もあったけど、すごく楽しかった
- ・一つのドラマを完成させるのは、思ったより難しかった
- ・男女が協力しないと、いい作品が出来ないことがわかった
- ・みんなで楽しくやれたのでよかった とても楽しくて何度でもやりたい
- ・ビデオに映らなかったからつまらなかった
- ・制作を途中で止めてしまうと意欲が薄れてしまうので、間を置かないで続けてやりたい

4. 映像制作に関するカリキュラムの検討

児童生徒が映像制作を進めていくうえで、言葉や文字と同様に学年や能力に応じた段階的な指導が必要であると考えた。

「映像表現活動カリキュラム」（表1）では、低学年のうちからいろいろなメディアによって映像表現活動に親しませるということで、教師が主導的に行うように考えている。そして、中学年では、いろいろなメディアを児童自身が操作し慣れ親しむことを前提に、また、高学年については、児童が主体的にメディアを操作して映像表現活動を行っていくようにするため、教師は補助的な役

割を担うことになる。

「映像制作能力形成カリキュラム」(表2)は、ビデオによる映像制作について考えたもので実際に機器操作が入ってくるため中・高学年を対象として考えたが、児童の能力に応じて適宜行うことが望ましい。

表1 映像表現活動カリキュラム

	低学年	中学年	高学年
内	・絵本を鑑賞にする	・VTR カメラ ・鑑賞や劇を作る (絵、ストーリー、役)	・VTR (役柄、台詞、演技、スタッフ)
	・4コマ漫画を作る	・OHP カメラ	・OHP 作る(テーマ、構成)
	・簡単な鑑賞劇を作る (絵・ストーリー)	・VTR 簡単な新聞・ポスターを作る(テーマ、文字、絵)	・カメラ ・OHP 作る(テーマ、構成)
	・簡単な指示物を作る (文字・絵)	・カメラ OHP ・OHP(TP)シートを作る(テーマ、文字、絵)	・OHP VTR ・効果的なOHP(TP)シートを作る(テーマ、技法)
外	・簡単なOHP(TP)シートを作る(文字・絵・表)	・OHP VTR ・4コマ漫画を作る(テーマ、文字、絵)	・カメラ OHP ・効果的な写真を撮る(テーマ、技法)
	・お話を録音する	・CR VTR ・写真を撮る(テーマ) ・BGMを入れてお話を録音する ・VTRを使って簡単な作品を作る	・カメラ OHP VTR ・VTRを操作して作品を作る(映像+アフレコ+タイトル) ・CR VTR

*CR-カセットレコーダー

表2 映像制作能力形成カリキュラム

	中学年	高学年
つか	・確認 ・状況	身の周りのことから題材を見つける
	・主眼 ・課題 ・の化	作ってみたい題材に題名を付ける 「伝えたいことは何か」を話し合い、それに合う題名を考える
組み立て	・構 ・造 ・化	大まかな粗筋を考える 「いっしょにけんごり」をもとに、見る人がよく分かるように粗筋を組み立てる
	・イ ・ス ・メ ・ト ・リ ・ジ ・リ ・化	粗筋をもとに簡単なお話を作る 場面毎に分けて、それを簡単なイラストや文章によって表現する
伝え	・場 ・面 ・成 ・成	お話をももにつなぎ撮りて作品を作る 全体の流れを考えて簡単な演義をする。
	・制 ・技 ・作 ・法	基本的なビデオのとりかたで撮影する 効果的に伝えることを考え技法を工夫する
評	・自 ・分 ・た ・ち ・の ・作 ・品 ・に ・つ ・い ・て ・話 ・し ・合 ・う	「おもしろいこと(物語)」という視点で話し合う

V まとめと今後の課題

これまでの研究で、映像に対して、多くの児童生徒が強い興味・関心を持っていること、そしてビデオ撮影の経験者が作る楽しさや喜びを味わっていることをとらえることができた。

そして、グループによる制作活動ということで、協調性が生まれるきっかけともなり、男女間の協力体制ができるなど、学級経営上もよい影響が出てきている。

これらのことから、ビデオ制作を経験することの有効性が考えられる。

また、映像制作能力を育成するためには、児童生徒の制作意欲を持続させることが大切であるということがわかった。その手立てとしては、次のようなことが考えられる。

- ・作品が誰かに認められること。(校内放送による作品の放映など)
- ・指導者などが、発想の手掛かりを与えることにより、児童生徒の制作意欲をかきたてることができる。しかし、大人の考えるパターンにはめ込まないように気をつけること。
- ・作品作りの目的意識をはっきりさせる。このことは、制作意欲の持続にもつながり大切である

が、その方法として取り入れたラベル発想法は、極めて有効である。

- ・ビデオカメラの基本操作がわかる程度の、簡単な技術指導を行うこと。ただし、技法のみにとられないよう注意する。

また、映像制作を始めたことで、テレビのニュースキャスターやナレーターの話し方に関心を示す子や、物語の展開・カメラワークなどに興味をもつ子、カメラマンの大変さに気づいた子など、作り手としての意識が芽生えてきた児童も多い。このように、子どもたちは一つのことから多くのことを学ぶことができる。したがって、映像制作についても言葉や文字と同じように、小学校のうちから年齢に応じた段階的な指導が行うことにより、更に映像学力を高めることができると考え、大まかな「映像表現活動カリキュラム」(表1)と「映像制作能力形成カリキュラム」(表2)について検討してきた。しかしながら、この2つのカリキュラムについては、今後更に研究し検討を行っていく必要があると思われる。

また、児童生徒が映像制作活動を行っていくには、次のような問題点もあげられる。

- ・現在のカリキュラムにおける、映像制作時間の確保の難しさ。
- ・映像制作活動に適応した環境設備の充実と工夫の必要性。

これらについては、非常に難しい問題であるが、新しい情報化社会に向けて、言葉や文字による意思表示とともに、ニューメディアによる意思伝達能力の育成はますます重要視されてくると思われる。

上にあげた問題点を含め、今後学校教育の中でどのようにニューメディアによる意思伝達能力の育成を位置づけていくかを考える必要があるといえる。

おわりに

本研究を進めるにあたり、ご指導を頂いた多くの先生方をはじめ、ご協力をしてくださった方々、そして、あらゆる面から研究を応援し支えてくださった所属校の先生方に、心から感謝を申し上げます。

・参考文献

後藤 和彦	「メディア教育を拓く」	ぎょうせい	1986年
野田 一郎	「メディア教育カリキュラムの開発」	ぎょうせい	1988年
吉田 貞介	「映像時代の教育」	日本放送教育協会	1985年

・指導助言

電気通信大学教授 専門員	滝沢 武久先生	川崎市立白山小学校長	杉山 徳夫先生
近代映画協会	映画監督 新藤 兼人先生	川崎市立中原中学校長	石田 啓一先生
近代映画協会	映画監督 勝目 貴久先生	川崎市立商業高等学校教頭	石川 一雄先生